

冬、五編



1. 白い息

彼女は少し恥ずかしいロマンチストだ。

窓ガラスに息を吹きかけて、ねえねえ雪君、と振り返らずに彼女は僕を手招いた。僕はマグカップを片手に仕方なく立ち上がる。つまらなそうな僕の冴えない顔が、楽しそうな彼女の背後に立つのが、まだ今年の掃除をしていない窓ガラスに映った。

「窓、あんまり綺麗じゃないよ？」

「そんなことより大発見なのよ」

僕の忠告など意に介さずに、見ていて、と彼女は息を吸い込んで、そうっと窓ガラスに吹きかけた。彼女の息で窓が白く曇る。

「ね？」

得意げに彼女が僕を振り返る。

「なに？」

僕は彼女が何か窓ガラスに文字か絵でも描いたのかと目を凝らす。

「白い息を閉じ込めたみたいでしょう？」

「ああ、そういうこと」

僕はマグカップに口をつけた。唇に触れたコーヒーはまだ熱くて飲めない。

「もう。感動が薄いなあ」

「すみませんねえ」

彼女は、はっと窓ガラスに息を吹きかけた。窓ガラスは、先ほどよりも広範囲に濃く曇る。人差し指で、彼女はそこに「ゆきくんはネコジタです」と書きつけた。

「何を書いてるんですか、千鳥さん」

「わたしもコーヒーが飲みたいです」

猫舌ではない千鳥さんは、僕のマグカップを奪うと口をつけた。

寒い日。千鳥さんは外に出ると、とりあえず、はあっと息を吐く。

そして、立ち上る白い息を消えるまで見つめて、ぶるりと肩を震わせる。

「寒いねえ」

眉を寄せて目を細めて言いながら、口の端はなぜか嬉しそうだ。

「何でいつも息を吐くの？」

「えっ、雪君はわたしに呼吸を止めろと？」

「じゃなくて。白い息」

ああ、と彼女は頷いた。

「嬉しくない？ 白い息」

「嬉しい？」

「嬉しくならない？」

言って、彼女はふーっと息を吐いた。白い雲のなりそこないのように、それは空へ向かって消えていく。

「子供みたいだね」

僕が言うと、千鳥さんは、なにおう、と冷たい手で僕の首を絞めにかかった。そういうところが子供っぽいというのだけれど。

千鳥さんはちょっと恥ずかしいロマンチストだ。

「雪君、わたし、何で白い息が嬉しいか分かったの」

コートのフードを弾ませて、千鳥さんが体ごと振り返る。そのまま後ろ向きに歩き出す。

「危ないよ、千鳥さん」

はらはらと僕の手が浮く。

「それはね、人があったかいんだって気づかせてくれるからなのですよ」

「そうですか。ねえ、前を向いて歩いてほしいんだけど」

千鳥さんは自分の大発見に興奮して頬が赤くなっていた。

「この間、ラーメンを食べていて気づいたの」

「ラーメン？」

「味噌ラーメン」

「どうでもいいよ」

僕は手を振る。

「ラーメンの湯気を見ていて気づいたの。あったかいから白い湯気が出るのね。ああ、人の白い息も同じねって」

「まあ原理は同じだけど」

「人もラーメンも同じね」

「いや、それは違うでしょう」

「寒い日って幸せね。あったかいものがとっても嬉しくなるから」

言いながら、千鳥さんは小さな体で僕の腕にしがみついた。分厚いコートごしで、あったかいかどうかなんて分からなかったけれど。たぶん、僕の体温は上昇しただろう。

「ラーメンでも食べて行こうか」

「雪君は何ラーメン？」

「塩」

駅まで千鳥さんを送った帰り道、僕は夜空に向かって白い息を吐いてみた。

頼りない魂みたいに、吐息はすぐに夜にほどけて跡形も見えなくなる。一回、二回、三回、と続けて息を吐いてみる。そうして上を向いて歩いていたら、電柱にぶつかりそうになった。

「……………」

僕は無然として、額を押さえた。周囲に人気がなかったのは幸이었다。

「あー、あ」

大きく吐き出した息が、一瞬だけ夜をけぼらせる。月の光も覆われた。

「千鳥さんのせいだからな」

誰にも聞こえない独白も、すぐに消えてなくなって、恥ずかしさに少し熱くなった体だけが残った。

2. 凍る指先

朝というのは時間がないものだ。

とりわけ、冬の朝は布団のぬくもりに引きずられて起きるまでの時間が常の倍はかかる。必死で寝癖を直して、それでも朝ごはんはしっかり食べて、昨夜用意しておかなかったことを恨みながら教科書やノートを時間割にそろえて鞆に押し込む。コートを羽織って、マフラーをぐるぐると巻きつけたところで、

「ど、どうしよう」

わたしはものすごく困っていた。

困っている原因は、手に持った手袋だ。去年から愛用している、白い毛糸の手袋だ。可愛い兎の形のボタンが少し子供っぽいけれど気に入っている。

「う、うーん」

部屋の中にも指先の冷たいわたしには、手袋は欠かせない。ましてやこんな寒い日に手袋無しで外に出るなど、言語道断、理解不能、生き地獄、とまではいかないけれど、とんでもないことではある。

そんなわたしが悩むことになった諸悪の根源は、柊君にある。

「風花一、何してるの、遅刻するわよー」

階下からかけられた母親の声にはっと時計を見る。

「大変！」

手袋は慌ててコートのポケットに突っ込んで、わたしはどたばたと階段を駆け下りた。

「おはよう、柊君」

すでに公園の前で待っていた柊君がわたしの声に顔を上げる。

「ああ」

柊君の視線がわたしの額に向かう。「前髪、はねてる」

「えっ」

わたしは両手で前髪を押さえた。

「走ってきたの？」

柊君は片手を口元に当てた。目元が優しいのは、笑っているからだ。手袋はしていない。毛糸の感触が嫌なのだと saying していた。

「ちょっと、寝坊しちゃって」

寝坊はしていないのだけれど、手袋で悩んでいて出遅れたのだ。

「ああ。寒いから、起きるの大変だよーね」

柊君は特に疑問も挟まずに、先に立って歩き出した。公園の中を突っ切って行くこの道は、学校までの遠まわりである。通称、恋人ロードと学生たちの間で呼ばれているこの通学路は、長いことわたしの小さな憧れだった。

「待ち合わせの時間、遅くする？」

こんな遠まわりなどせず、みんなが通る通学路を行けば、もう少しゆっくり待ち合わせをしても始業には間に合う。

「ううん、頑張ってる！」

わたしは大きく首を振った。お布団のぬくもりなどに負けてたまるか。そんなものより、柊君と寒い道を歩くほうが何倍も魅力的だ。

「そう。頑張ってる」

可笑しさに耐えかねたというように柊君が吹き出した。

「何でそこで笑いますか」

「あはは」

柊君は笑ってごまかした。

「もう」

わたしは怒ったふりをしながら、左手で右手の指を包んだ。我ながら、氷のような指先だ。指先だけなら氷の女王も夢じゃない。

「あれ？ 手袋は？」

きた！ 待ってました！

と、わたしは勢いよく顔を上げる。勢いが良すぎたか、と気がついて、ごまかすように鼻を啜って咳払いをした。

「うん。急いでたら、忘れちゃって」

不自然さの欠片もない台詞に、わたしは心の中でガッツポーズをとりながら、ちらりと柊君の手に目を向けた。

「ふうん？」

「だからー、そのう、柊君の手など……………」

ちらりと柊君の顔に目を向ける。柊君の視線は恥ずかしげにわたしの顔を見返して……………はおらず、わたしのコートのポケットを淡々と見つめていた。

「ポケットに入ってるよ、手袋」

はっ、と視線を己のコートのポケットに向けると、お気に入りの手袋がポケットからはみ出していた。走ってくる間に飛び出てきてしまったものらしい。

「こ、これはびっくりー」

思いきり不自然な反応を繰り返しながら、わたしは恥ずかしさもいっぱいにもそもそも手袋を装着した。温かい。耳の先までぽっぽと火照るようだ。

「良かったね」

笑いを堪えながら、柊君は手袋をしたわたしの手をとった。そしてそのまま歩き出す。

「柊君？」

「うん？ 少し急がないと、また走ることになっちゃうかもしれないよ」

「いえ。そうではなく。手。あの、毛糸の手袋、嫌だったんじゃない？」

手袋はしないの？と尋ねたら、毛糸の感触が嫌なんだよね、という返答だった。だから、手をつなぎませんかという切なる願いも一度は涙をのんで我慢をしたというのに。

「うん。そうだけど」

空いているほうの手で、柊君は頬をかいた。そんな仕種は初めてみたと思れ直すわたしだ。
「我慢してあげるよ」

照れまじりの笑顔に今度こそわたしは惚れ直して、まだ半分恐る恐る、つないでくれた手を握り返した。

3. ホットココア

夜中の0時である。

深々と冷えた夜は静寂という言葉が似つかわしく、窓の向こうの星の凍てつきも音となって聞こえてくるようだった。時を止めたかのような不思議な沈黙に地球が覆われているようだった。窓から公園を挟んで向かいに見える団地には、まだいくつか明りを孕んだ四角いカーテンも見えているというのに、誰もが呼吸をそろえて静謐を守っているかのようだった。

「椿、お待たせ」

声に、わたしはカーテンを閉めて振り返った。

漂ってきた甘い香りに、思わず鼻から息を吸い込む。

「待ってました、聖ちゃん！」

スキップをしては、階下で眠っているはずの彼女の両親に迷惑なので、小声を精一杯弾ませて、わたしは聖ちゃんのもつお盆を受け取った。二つのおそろいのマグカップには湯気の立つココア。プラスチックの透明な器にはクッキーが山盛り。

「へっへっへ。こんな時間に甘いココアにクッキーとはお主も悪よのう」

浮かぶ笑みを堪えきれずにわたしがふざけると、

「うふふ。サンタさんにプレゼントをもらえない悪い子としては、このくらいまだまだ序の口でしょう？」

ドアを静かに閉めて、聖ちゃんは暖かいカーペットを敷いた床に座る。聖ちゃんがドアを閉じると、廊下の暗さも閉め出され、部屋はオレンジがかった光に満たされた。

「おおー。これがまだ序の口だなんて、聖ちゃんはとんだ悪女だったのね」

わたしは聖ちゃんの向かいに座って、間の小さな組み立て式のちゃぶ台にお盆を置いた。お盆から、聖ちゃんは自分のマグカップを取り上げる。湯気をふうっと吹いた。

「そうね。明日の模試のことも今夜は忘れちゃうわ」

「忘れちゃうなら、それを言わないでよう」

唇を尖らせながら、わたしも熱いマグカップを両手で取る。湯気を吸いこんだ。わたしの中で、ホットココアは冬の幸せなもののベストスリーにランクインする。

「まあまあ。それじゃあ、今夜は女同士、飲み明かしましょう」

「とことん付き合っただけでしょう」

わたしと聖ちゃんは笑みを交わすと、そっとマグカップで乾杯した。

「あーあ。それにしても、クリスマスだというのに、若い年頃の女の子が暇を持て余しているなんてねえ」

足を投げ出してわたしは天井を仰ぐ。電気の紐にぶら下がっているのはクリスマス気分のつもりか、小さなサンタのオーナメントだった。

「あら。わたしと一緒に不満かしら？ 美味しいココアもあるのに」

「不満だなんてとんでもないですよお嬢さま。美味しいクッキーもありますし」

笑いながらわたしはお皿からクッキーを摘んで口に放る。美味しい。危険な甘さだ。

「ふふふ。でも、来年のクリスマスも一緒にいるかどうかは分からないわよ？」

茶目っ気を含んだ瞳を向けながら、聖ちゃんもクッキーを摘んだ。

「そうですねえ。わたしにも素敵な恋人の一人や二人」

「うんうん。二人や五人の恋人とどんな夜を過ごすつもりなのかしら？」

「おいおい、わたしモテモテか」

「わたしには敵わないけれど」

「言うねえ。お主も悪よのう」

「その台詞、気に入っちゃったのね」

笑みを交わす。

「クリスマスかあ。子供の頃はさ、煙突がないからサンタさんが来られないよ、って真剣に心配しなかった？」

「そうそう。窓の鍵をこっそり開けたままにしておいたり」

「ね。後は絶対寝ないで起きててやろうと布団の中で頑張っていたり」

「ふふふ。わたしは逆に早く寝なくちゃって焦ってなかなか寝付けなかったりしたわ」

「ああ。あの頃はあんなに純真な子供だったのに」

「今ではこんな悪女になっちゃって」

同時にマグカップに口をつけた。ココアの甘い香り。何年後かにはこの中身はアルコールを含んだものになっているのだろうか。それはまだ、子供の頃のサンタクロースのように、憧れを孕んだファンタジイのような未来だけれど。

「やっぱり明日の模試が心配になってきました聖さん」

「あらあら。悪女失格ね」

あはは、と笑いあっていたら、頭の上にぽとりと何かが落ちてきた。

「ん？」

「あら」

拾い上げると、電気の紐についていたサンタのオーナメントだ。

「メリークリスマス、ですって」

「それはそれは、ありーがたりすます」

「ちょっと無理がありすます」

「あはは」

「ココアのお代わりはいかが？」

「いただきますすます」

笑いながら、お盆を手に、聖ちゃんが立ち上がる。

「明日の模試で良い点が取れますように」

サンタのオーナメントに念じる。

「それはサンタさんも管轄外じゃないかしら？」

「そこを何とか」

「新しいココアを入れてきたら、一緒に勉強しましょうか」

「はあい」

聖ちゃんがドアを開けると、廊下の冷やりとした空気が滑り込んできた。魔法が解けて、時間が少しずつ動き出す。外の通りを、車が走って行く音が聞こえた。耳を澄ましてみたけれど、それを引く鈴の音は残念ながら聞こえてこなかった。

4. 雪を待つ

大きな口を開けて、肉まんにかぶりつく。

ジャングルジムはやっぱり座り心地が悪いよなあとかどうでもいいことを思いながら、夜空を仰いだ。星がちらちらと瞬いている。

「おっかしいなあ。今夜こそ初雪って、天気予報のお姉さんが言ってたのに」

「降りそうもないねえ」

ジャングルジムには上らずに、背中をそれに預けながら透子も空を仰いだ。長い髪が鉄くさいジャングルジムに触れてしまっている。

「おーい、雪ー」

「おおーい、雪さーん」

俺が呼びかけると、透子も口の横に手を立てて、夜に向かって呼びかけた。

「降れー」

「降れ降れー」

だがしかし、俺と透子の純真な呼びかけも虚しく、しん、と夜空は静まったままだ。冷たいやつだな。雪だからな。何て。

「こんなに寒いのに雪が降らないなんて、けしからんなあ」

もぐもぐと肉まんを頬張りながら俺は頬を膨らませた。咀嚼して、すぐに頬はへこんでしまう

。

「まったくもってその通りですねえ」

透子は缶のコーンポタージュを両手で挟んで唇に当てた。

「透子さんや、これは天に苦情を申し付けるべきではないですか」

「ええ。宛先は冬將軍で良いかしら？」

うむ、と俺は重々しく頷いて、肉まんの最後の一口を押し込んだ。手の中が温度と食料を失って寂しくなる。

「透子さんや」

「はいはい」

「そのコーンポタージュを一口」

「はいはい」

苦笑しながら透子は缶をこちらに差し上げてくれた。冷たい指先には熱すぎる缶を受け取って、俺はありがたく口をつける。

「間接キッス」

愛を込めて、俺がにこにここと笑いかけると、透子は上目遣いに俺を見上げて、

「美味しい？」

余裕の笑みで目を細めた。

「美味しいです」

負けた気持ちで、俺は大人しくもう一口コーンポタージュをいただくと、大人しく缶を透子に

返した。

はあー、と白い息を夜空に吐く。

「降らないかなあ、雪」

「うーん。少なくとも今夜は降らないんじゃないかなあ」

「ああ、降るような星空だ」

「流れ星でも代わりに降ったら良いのにねえ」

「あ、オリオン座！」

「凜君が唯一分かる星座ですね」

「馬鹿にすんなよ。他にもあの、ひしゃくの奴とか……」

「あ、UFO！」

「えっ」

「あはは」

透子が楽しそうに笑った。何だよ、と俺はむくれながらも、楽しそうな透子につられてやっぱり笑ってしまう。

冷たい風が吹いた。透子がぎゅっと目をつむる。長い髪が煽られて、耳が見えた。

そろそろ帰ろうか、という台詞が喉まで出かかった。でも帰りたくないなと思った。

この限りなく無駄な時間。

だって、寒いだけだし。これで風邪でも引いたらそれこそ馬鹿みたいだし。

もう夜も遅いし。透子の親だってまだ彼女は帰らないのかとやきもきしてるかもしれないし。

有意義なことなんか、何一つないし。それでも。

「雪が降るまで一緒に待ってようって言ったら、怒る？」

俺は背を屈めて、透子に尋ねた。

「むしろそれを尋ねる君に怒るよ」

透子は悪戯っぽく笑うと、指を弾いた。

「そっか」

へへ、と俺はしまりなく笑って、空を仰ぐ。雪は降る気配もなく、星がいつそう眩しいだけだ

。

「雪ー、降れー」

透子が夜空に呼びかける。

「降れー」

俺も続いて呼びかけながら、まだ降るなー、とこっそり星に祈っていた。

5. 猫背をやめてみた

寒いと背中が丸くなる。

それは冬将軍の容赦ない攻撃から身を守るための、小さな人間のなけなしの防御である。

「寒い寒い寒い」

僕はコートの前を搔き合わせ、呪いのように呟いた。

今年の冬将軍はかなりの強敵でコートの防御力などでは到底防ぎきれものではないようだ。

そして僕の工夫も飾りもない呪詛も、効果を及ぼしてはくれないらしい。

「晁。夏に暑いって言うときさらに暑くなるみたいに、寒い時に寒いって言うときさらに寒くなるだけだよ？」

明が両手をポケットに突っ込みながら、合わせた歯の間から白い息を吐いた。寒いくせに涼しい顔をした我が兄は、北風に屈することなく背筋も伸びている。

「これが言わずにいられたっての。明も白い息とか吐くな。余計に寒いから」

「無茶を言うなあ。晁君は」

はっはっは、と嫌味みたいに、明は白い息を明るくなってきた空へと吐き出した。

「あー寒い寒い寒い。僕はコタツでだらだら栗きんとんとか摘まみながらつまらないお笑い番組とか見ていたかったのに。大体、初詣なんて、この時だけ余計な信心発揮することないじゃんか。もうこの辺であの辺の太陽とか拝んで帰ったら良くない？」

神社への坂道を目前に僕は断固として足を止めた。北風が、こっちへ来るなどというように、額に吹き付ける。おうとも。僕だって行きたかないや。

「ここまで来たのに？」

明は坂道に一步足をかけたところで振り返った。

「この坂道が嫌なんだって。大体、何が楽しくて正月早々兄貴と二人で仲良く初詣……………」

「文句ばかりだなあ、我が弟君は」

「む」

僕は言い返そうと唇を突き出したけれど、憎たらしい兄をぎゃふんと言わせる言葉を持たなかった。

「文句を言ったところで、何も変わらないよ？ 寒いのは寒いまんまだし、坂道だって平坦な道になったりしない」

「それでも、文句の一つも言いたくなるのが人情だっただけ」

「それもそうだねえ」

微笑み一つで明は僕に背を向けて先へと歩き出す。

仕方がないのでしぶしぶ僕はその背中に続いた。兄の背中についていくのは、弟の悲しい性のようなものだ。

「明、身長今何センチ？」

「177」

「げ」

「げって何」

「去年より伸びてる」

肩を縮こませながらも、後ろから僕は明の後頭部を睨みつけた。まだ成長期だということか。諦めの悪い奴だ。

「常に弟の上をいくのが兄の役目ですから」

顔だけを一瞬振り向けた明は大人のふりをして笑っていた。もう成人はしているわけだけれど。昨夜だって、僕をのけ者にして、叔父さんたちとお酒なんて飲んじゃっていたわけだけれど。

「この格好つけめ」

「悔しかったら君も格好良くなってみたまえ」

笑いながら、明はまた前を向いて歩きだした。僕は明の後ろを歩きながら、ぐぐっと背伸びを試してみた。それでも明の背に勝てない。いや、それはこの坂道のせいだ。

悔しかった勢いで、僕は地面を蹴って明の前に出た。

「お」

という明の面白がるような声になど耳を貸す必要はない。明が前に立つからと、いつまでも後ろをついて歩く必要なんかない。背だって、いつまでも明より低くある必要なんかないんだから、僕の成長期！

明の背中から前に出ると、北風と盛大にぶつかった。思わずよろめいた。鼻水が出る。すすり上げる。坂道の向こうの空は新しい太陽が薄く輝いて、明るく開けていた。

「晁、先に行ったら、神社で配ってる餅もらっといてな」

後ろからのんびりした明の声がかけられた。

「な！ もしかして最初からそれが目的かよ！」

「母さんに頼まれてたんだよ、お使い」

心境としては、倒したと思ったボスが実は中ボスに過ぎなかった、という具合だ。なんてこった。

「ほら、早くしないとなくなっちゃうかもしれないぞ」

行け行け、と明は自分はゆったりと歩きながら手を振った。

「結局使い走り……！」

ああ、これも悲しい弟の性なのだ。

僕は大いに嘆きながら、せめてもの意地で北風を跳ね返すように胸を張った。負けてたまるか冬將軍。まだまだ小さな僕かもしれないけれど。背筋を伸ばせば少しは大きく見えるだろう。ああでもやっぱり。

「寒い」

ぶるりと背中を震わせて僕は首をすくめるのだった。

冬、五編

<http://p.booklog.jp/book/39211>

著者：猫ト みかん。

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/7hoshineko/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/39211>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/39211>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.